九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 大江嘉言考 ： 詠歌活動とその交友

福井, 迪子
九州大学助手

https://doi.org/10.15017/12169

出版情報：語文研究. 34, pp.16-31, 1972-12-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

# 大江嘉言考

## ――詠歌活動とその交友――

福井迪子

平安朝中期の歌人大江嘉言については、殆んど和歌資料のみに限られるという資料の乏しさなどのためか先人による研究も無く、大江以言[1]や儀同三司[2]、能因法師[3]についての論考の中にいくらかふれられているにすぎない。なお伝本については、最近藤本一恵氏によって京都女子大本が京大本対校で翻刻されるに至っている[4]。

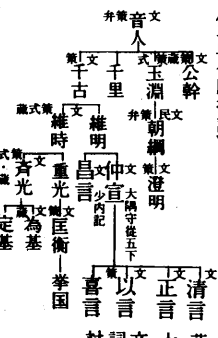
拙論は、嘉言の家柄、境遇、家集についてふれ、家集と同時代の勅・私撰集及び私家集相互の関係から、その詠歌活動と交友について考察することを旨とする。

テキストには彰考館本を用い、京都女子大本でこれを補った。歌の番号は彰考館本所収歌に通し番号を附したものである。

### 一、家系・境遇

平安朝時代の翰林江家からは、音人・千古・朝綱・維時・斎光・匡衡・為基ら多くの学儒、和漢兼作の文人が出たことは周知のことである。嘉言の家系は、その江家の傍流に属した。尊卑分脈によってこれをみれば次のようである。

〔尊卑分脈摘記〕




系図に見るように父仲宣をはじめ清言・正言・以言の三人の兄らも皆文章生出身者であった。限られた資料で、先学[5]のすでに述べられるところではあるが、その略歴をみると、

父仲宣は、弓削姓を名告り、天禄元年十二月十六日冷泉院主典代出納から外記職を歴任、天延二年従五位下、三河権介を経て天元三年正月には某国守となっている（外記補任）。

長兄清言は、長保三年正月民部少録[6]から権少外記となり、長保五年まで小外記・大外記を歴任（外記補任）、寛弘元年正月周防権介を経て寛弘某年から長和二年頃まで薩摩守の任[7]にあっ

た。

次兄正言については資料に乏しいが、正暦四年頃勘解由判官[注8]、寛弘三年頃には尊卑分脈に記された「大学允」の官にあったことが知られる[注9]。

三兄以言の音人・朝綱・千古・匡衡を恥かしめぬ碩儒であったことは言を俟つまでもないが、その経歴は[注10]、永観の頃文章生外国として伊予掾。永延元年頃文章生対策。長徳元年頃大内記。二年頃には勘解由判官。同年十月伊周の失脚により飛弾権守に左遷され、後、長保元年八月文章博士。晩年には式部権大輔の官を得て活躍している。

また叔父の昌言も文章生出身であり、長く内記の官にあった[注11]。かくの如く嘉言の近親者には文章生の出身が多く、いずれも皆文筆をもって事とする官職にあったと言える。

嘉言も中古三十六歌仙伝の略伝に

大江嘉言。大隅守弓削仲宣男。正暦三年十二月十九日為文章生。長保三年正月廿四日任弾正少忠。于時弓削。寛弘六年正月廿八日任但馬守。于時造弾正台功。

とあり、やはり文章生出身であったことがわかる。恐らく三人の兄達と同様、中流文人官僚の子弟として文章道に志し、江家の一員として東曹に学んだことであったろう。そして文章生となったのは、推測するところ以言の数才下の弟とみて、三十三才～三十五才くらいにはなっていたと思われる。江家という家柄やこうした経歴、後述する交友関係などからもおそらく詩文に親しむ生活であったと思われるが、現在嘉言の詩文を見ることは出来ない。文章生出身であるにもかゝわらず、残された資料からは嘉言が詩文よりはむしろ歌に親しむに至ったようである。その理由は必ずしも明らかでないが、三人の兄がそれぞれ文筆にかゝわる官にあったのに対して、京官とはいえ、文筆と全くかゝわりの無い弾正台の任に長くあったことにも一種の疑問が残る。

また、弓削氏が大江氏の傍流であるために「文章道における非世襲氏族の位置に置かれ[注12]」、且つ軽んぜられた事は、次に記す『本朝文粋』や『江談抄』の一文によってもその一端を窺うことができよう。

『本朝文粋』巻六「申男能公学問料状」

右伏検故実、菅原大江両氏建立文章院、分別東西曹司。為其門徒習儒学、著氏姓之者、済済于今不絶。因斯此両家之伝門業、不論才不才。不拘年歯。（中略）大江定基以五代当仁。其時有田口斉名、弓削以言者。雖工文不競。夫然則累代者見重、起家者見軽明矣。

『江談抄』第四の逸話

鷹鳩不変三春眼　鹿馬可迷二世情　以言

此句依恨暗漢雲之字細。叡感之餘擬補蔵人。雖然入道殿并殿上人不承引之故不補。仍為放言所作也。其時殿上人諺曰。湯気欲上云々。本姓弓削ナレバ也。

嘉言兄弟は、その弓削姓から大江姓に復した。外記補任清言の条には「長保五年十二月二十八日改姓大江朝臣」との注記があり、尊卑分脈以言の条にも「為弓削姓後帰本姓大江」と記されている。嘉言について見れば、拾遺集入集歌及び麗花集の香紙切・八幡切の残存部にある五首中三首が[注13]「弓削」姓で記さ

れている。これら弓削姓で記された歌をみると、ほぼ長保五年末頃までに詠まれたと思われるものであって[14]、後藤氏の言われる如く清言改姓の時点に嘉言ら兄弟共に大江姓に復することを許されたのではなかったかと考えるのである。

なお、ついでにいえば、麗花集の成立について述べられた中に、堀部正二氏[15]は図書寮本古写本中古歌仙三十六人伝により、曽祢昇氏[16]は裏辻家（架蔵）本を用いられて、共にその「寛弘六年正月廿八日任但馬守」の条に『于時弓削造弾正台功』と流布本に無い弓削の注記のあること及びやはり流布本に無い『七年孕』が記されていること、拾遺集にも弓削姓で入集していること等から、嘉言の改姓をその最晩年、寛弘六年～七年の間の事とみられている。問題は中古歌仙伝の性格に及ぶこととなり、にわかには解決しがたいが、注記は一応措くとしても、私は流布本に無い没年の記述について残存資料から疑問を感じるのであり[17]、又、曽祢氏の麗花集成立可能と推定される期間についても疑問を抱かざるをえない点があって[18]、寛弘六、七年改姓説には今のところ首肯しかねるのである。

次に中関白家との関係についてみると、長兄清言の妻は、儀同三司伊周家の女房であり[19]、以言は中関白家の家司的存在であったらしい。長徳元年道隆が薨じ、翌二年には伊周・隆家による花山院弓射事件が起り、正暦の春を謳歌した中関白家も没落の一路を辿った。以言が飛弾権守に左遷されたことは前述したが、其後も帥方の人であった為に粟田山荘の障子の詩の撰に入れられなかったとの逸話を江談抄「粟田障子坤元録詩撰者事」は伝えている。即ち

又被申者。粟田障子詩。輔尹卿撰之。坤元録詩。維時卿。然則作者與判者。各互有長短。随其功也。粟田詩以言以帥殿方人不被入之。怨言云。雖坤元録。絶句一首者。何不罷入哉云々。故文章博士実範後伝聞此事。不被評此書云々。

と。以言の作詩活動が伊周と極めて密な関係を持っていた事は尾原久子氏「儀同三司小考」及び後藤昭雄氏の「大江以言考」の論に尽されていよう。

小右記によれば[20]、正言は正暦四年頃しばしば伊周の使を果しており、嘉言は寛弘二年四月十八日、隆家の使として賓資を訪れている。嘉言が伊周、隆家京都召還後も中関白家に仕えていたことを示すものである。

なお、伊周の左遷に際して正言・嘉言のいずれかが従ったとみられるふしがある。即ち拾遺集350に次の歌がある。

帥伊周つくしへまかりけるにかはじりはなれ侍りけるによみ侍りける　弓削よしとき

思ひ出もなき故郷の山なれどかくれゆくはた哀なりけり

同歌は詞花集[21]には正言の歌として入集、親交のあった能因も正言の歌として玄々集[22]に納めている。或は拾遺集の誤りを詞花集が正したとも考えられ、真相はわからぬが一つの解釈を提示してみたい。

家集21には

せきのゐといふところにたひのうちに月をみるといふ心を

草枕程ぞへにける都いでていく夜か旅の月にねぬらん

との詠があり、新古今集931に「関戸院といふところにて羇中見月といふ心を」との詞書で入っている。尤もこの限りでは詠歌

時点も明らかでなく必ずしも伊周に従った時の歌としての証は無いのであるが、『栄花物語』「浦々のわかれ」に関戸院に於て伊周が病みとゞまった旨がある。地名の符合と都に程近い関戸院でかく詠んでいるところ、伊周が幡磨に下る間の、あの時間的経過を秘めての詠作ではなかったか。確かに正言と伊周の結びつきの方が資料的には嘉言のそれよりも強い。が、嘉言生存中に成った拾遺集の記載が誤りと証されぬ限り、一つの可能性を持つものとして敢えて一臆測を提示してみた。

いずれにせよ二人の中、どちらかが従った事は確かであり、兄弟共に中関白家とは深い繋りのあったことを物語るものである。

## 二、家集について

家集は自作歌のみ一八六首を収めたもので、雑纂形態である。詞書は短く具体性を欠くため、詠歌事情や詠歌年次について、家集自体では殆んど明らかにする事はできない。

嘉言は言うまでもなく勅撰歌人である。勅撰集入集歌は拾遺集以下三〇首。その中、家集にあるもの二三首（拾遺二、後拾遺七、詞花三、新古今四、続古今一、続後拾遺一、風雅二、新千載一、玉葉一、新続古一）、家集に無いもの七首（拾遺一、後拾遺三、詞花二、新古今一）を含み、家集所収歌が嘉言の詠歌のすべてで無いことを示している。猶、嘉言の歌は拾遺抄には入ってないが拾遺集に三首入っており、尊卑分脈に「後拾遺以下作者」と記すのは、拾遺集が弓削姓を用いているためである。私撰集では、麗花集五首、後六六撰四首、玄々集四首、万代集一六首等々の入集がある。こうした勅撰集・私撰集入集の面からもほぼ歌人としての位置を知り得よう。

家集には四季歌が最も多く、雑歌、恋歌の順であるが、その中に屏風歌一八首、絵を詠んだ歌数首の含まれる事は、やはり拾遺集時代の歌人であったことを示すものであろう。そして四季歌の中にも題詠と思しきものが多く、東（あずま）・伊予・備中など地方にも下ったらしく旅の歌・月を詠んだ歌の多いことにも注目させられる。歌は概して平淡なよみぶりである。しかし、中にやゝ奇抜な題材の試や誹諧的要素・藤原仲文に見る如き或種のからかいを含んだ歌などもみられ、平安貴族の時代的背景に負うものが大きいとは思うものの、なお嘉言自身の性格の反映とみられる面のある点で興味深い。

それでは家集を中心として嘉言の詠歌活動とその交友関係についてみてゆくこととする。

## 三、歌合への参加

嘉言の歌合への参加は、家集中42～44・107～109・172～177の三箇所にみられる。順を追ってみて行こう。

五月五日たちはきの歌合に卯花を

42うのはなのさけるあたり（サカリ）はやまかつのかきねはなれぬつきかとそみる

夏　草

43たひ人のかさをそれそとみるはかり夏のゝくさはたけおひにけり

いはひかつ

44きみか代ちよにひとたひゐりちりのしらくもかゝる山となるまて（は（後拾・京女本）　る（後拾・京女本））

この三首は、正暦四年五月五日東宮居貞親王の催された「刀帯の陣の歌合」出詠歌である。祝・卯花・郭公・菖蒲草・夏草・蚊遣火・瞿麦・蛍・蟬・恋の十題十番の歌合であった。[注23] 作者の明らかなのは道綱母の五首と嘉言の四首——家集に見えない「逢事の夢ばかりにもなぐさまばうつゝに物は思はざらまし」[注24]を含む——のみであって他は不明である。44の歌は後拾遺集にも入り、長承二年相撲立詩歌合にもとられ、人口に膾炙した嘉言の代表作の一つと言われる。[注25] 嘉言の出詠について

当時十八才の東宮居貞親王の私的な学問の相手であったか、刀帯に関係していたか、或は当時有数の歌人長能に歌才を認められていたかであろう。[注26]

と藤本一恵氏は推定される。嘉言と刀帯との関係は考えにくいだろう。しかし東宮は花山院の御弟にあたり、嘉言が院の知遇を忝うしていた長能と関係のあったことは確かであろうし、更に長能の妹道綱母の出詠を考えるとき、嘉言の参加もやはりそのあたりに起因するものと見るべきであろうか。

次に、長保五年五月十五日道長第法華三十講結願歌合[注27]での詠歌がある。即ち家集107～109の三首がそれである。

左大臣との、歌合　三首

107 月かけのみるほともなくあけぬれはなけのなかめもせられさりけり

108 いつしかときくたにあかすほと、きすた、一こゑそなきわたるなる
　はるかにほと、きすのなくをき、て
　みつのほとりの松にむかふ

109 きみか世のためしにたてるまつかせにいくたひ水のすまむとすらん

この歌合は、判者公任、詠み人輔親・兼澄・長能・輔尹・行資・為義・為政・道済・善忠・嘉言・敦信・祐挙・為時・為憲らを召して行われた。出詠の歌人の殆んどが同時に知名の文人達でもあったことは注目に価する。[注28]

嘉言は長保三年正月から弾正台少忠の官にあり、当時すでに一流を謳われていた歌人、輔親・長能・道済・好忠らに御しての出詠であった。嘉言の推定年令四十四、五才の頃と思われる。この頃には嘉言も、一応歌人としての位置を認められるに至り、中関白家との関係を保ちながらも道長傘下に入っていたことを物語るものであろう。

一応社会的な活動を示すものはこの二つであるが、家集の終りに近く次に記す六首がある。

〈大江嘉言集〉

左大臣いしやまにおはしますほとうたあはせにみねのほと、きす

172 さよふかみたゝ一こゑそほと、きすみねのこすゑになきわたるなる
　みつのほとりのほたる

173 みつのうゑにわたるほたるのかけみれはおのか思もよられさりけり

　山さとのうの花

174 山さとに心とはましうの花のさかりはいまとつけやしらまし

〈前大納言公任卿集〉

大殿石山にこもり給ひて題ともして歌合し給ひにけるに題をよみてありけるに峯の上の郭公

23123 山辺だに寝かたきものを郭公都の人は待ちやかぬらむ
　水の辺の蛍

23124 水の上にもゆる蛍に言問はむ深き心の中はもえずや

　山里の卯の花

23125 卯の花の散らぬ垣根は山里の木の下闇はあらじとぞ思ふ

さはのいほりのたち花

175ときはなる花たち花をやとにうゑてちよのたつきをまつ物にせん

くれかたき夏の日

176我きみかちよのはしめをけふよりはひとひくらすもひさしかりける

はなすくなき夜の月

177なか〳〵にくもりはてなはねぬ月をときときてらす夏のよの月

〔――、（）は筆者注〕

草の庵の橘

23126蓬生の繁き家には橘の香をたづねてぞ訪ふべかりける

暮れかたき夏の日

23127暮れかたき今日にて知りぬ石山の山の巌をいのるしるしは

影すくなき宵の月

23128忘れてもあるへきものをなかなかに雲間すくなき月をこそ思へ

五月雨はながむる程の水茎に君が言の葉みるぞうれしき

23129かくて奉れたれは

返し

23130言の葉をみるに袂の濡るるかな軒の玉水数も知られず

下段に記したのは公任卿集からの抽出歌である。後尾二首の贈答から、公任が石山寺の歌合に直接参加したものではなく、聞き及んで後に送ったものであることがわかる。[註29] しかしその六首の歌題は、傍線部四箇所に誤写を生じてはいるが、他は全く一致している。萩谷氏は『平安朝歌合大成』に於て、公任卿集の他に「拾得歌なし」とされるが、嘉言の歌は正しく石山寺に参籠した頼忠公の歌合のものと認められよう。その時期は、一条帝即位による政権交替期の頼忠落胆の頃、即ち「永延元年～三年五月の間」[註30]と推定されている。しかし家集では「左大臣」とあり、この家集の詞書が嘉言の残した歌仮古にさほど手を入れず編まれたらしいふしがみられるので、家集に因る限り或は頼忠公の左大臣時代（貞元二年（977）四月二十四日～十月十日）のことではなかったかと思われる。[註31] 嘉言の詠歌では家集中最も早い時期のものであろう。

## 三、交　友

前述の如く自作歌のみの家集は、詞書も短く友人名の記載も全く無いため、家集から直接贈答関係や交友関係を知る事は出来ない。が、幸い家集に残された歌題を同時代の私家集の中に求めることによって、同じ機会に詠じたと思われるものを拾い、交友について考えてみた。以下はその試みの結果である。

家集96・97に次の歌がある。

花をみむとてにはをはらはす

96はなちれはてもふれてみるにはのをもを心にもあらぬ風やはらはむ

かすみ山のいゑをこむ

97やまさとのやとはかすみにこめたれとかきのやなきのすゑはそとみ（とにみ）ゆる（京大本）

後者は拾遺集雑春1031に

帥のみこ人々に歌よませ待りけるに　弓削嘉言

山里の家居は霞こめたれど垣ねのやなぎすゑはとにみゆ

とあって、其の詞書から帥宮のもとでの詠とわかる。ところが

同じ歌題を求めてみると、桂宮本兼澄集に極めて類似した次の二首を見出す。

そちの宮にて三月十よ日はかりに人〳〵うたよませ給にはなをみてにはをはらはすといふ題を給はりて

1春のうちはちりつもるともきよめせしはなにけかるゝやとゝいはれん

春の霞山をへたつといふ題を

2行かよひ花に心はわかねともはるのかすみはなをへたてけり

帥宮邸での春の雅交を物語るものである。両者おそらく同座しての詠作であろう。敦道親王の帥宮となられた時点は定かでないが、嘉言の歌が拾遺集入集歌である事からみれば少くとも兼澄の若狭守を辞して散位となった頃、長保四、五年ころの詠作ではないかと思う。兼澄の1の歌は、後十五番歌合・相撲立詩歌合にもとられている。

兼澄は源信明の弟信孝の男、後に述べる道済とは片従兄弟にあたる。刀帯・左馬允・蔵人・若狭守・加賀守を歴任した受領階級の歌人であった。そして、元輔・輔親・長能・恵慶・安法・為基らと交友があり、河原院グループの一人でもあった。長保五年五月の道長第歌合では嘉言とも同座出詠している。また御堂関白記寛弘二年四月四日の条には「兼澄朝臣文千余巻献」の文字がみられ、蔵書家でもあり漢詩文にも造詣深かった様子が推察される。

帥宮との関係は、これ以外にはさしたる資料も見当らないが、嘉言は長保三年以来弾正台少忠として弾正尹為尊親王の下に在った、帥の宮は為尊親王の弟であり、「軽々」(大鏡)と評される美貌の好色漢ながらしばしば自ら詩会を催す[注32]など風雅の人でもあった。花山院はこの異母弟の宮兄弟と、大そう厚い交情を交されたという[注33]。嘉言は花山院へも出入りしたようでもあり、こうした関係から推して嘉言が帥宮に接する機会も自ら得られたのではなかったかと思われる。更にまた、後に述べる和泉式部との交友もあるいはこうした宮兄弟との関係に由来するものではなかったかと推察するのである。

家集93～95に左の三首がある。

〈藤原長能集〉

93たちはなのあたりはさらしほとゝきすかたえにすくる時なし[本]

ほとゝきすたちはなのもとにてまつ

94夜はくらしふけにはふけぬほとゝきすあなおほつかな一声もなけ

くらき夜まつ

95たれかまつゆきてきくらんほとゝきすまたよにふりぬよはの一こゑ

山さとにゆきてまつ

同歌題を他の私家集に求めると、兼澄集・長能集・和泉式部[注34]集から次の如き歌が抽出される。

〈和泉式部集〉

くらき夜ほとゝきすまつこゝろ

〈源兼澄集〉

庭なる橘の本にほとゝきすの声まつこ

ろ

「809くらきよはみれともみえす時鳥いつく計に

25くやしくそ花橘をうへてける山郭公をとつれもせす

くらき夜まつころ

26くらき夜にわかまちかねつ時鳥たとる〳〵もはつねきかせよ

また郭公をき、にいく心を

27ほと、きす初音き、けむ山道にあひさそはれぬ身をそうらむる

鳴てきぬらん

たち花のもとにて

810ここにしてまちこ、ろみむ旅鶴(ママ)花橘のかをにくしとや

ほと、きすの声を山へにたつねにいくを聞て

811郭公き、つときかはその山のふもとにわれはいるゑしつへし

かたらふ人のもとに五月のころほひいきたるに暗夜子規待といふ題をよますれは

19月みつ、待たに有をほと、きすなそやねなんと思ひける哉

長能集の詞書から、親しい人のもとに集うての詠作とみられる。詠歌年次は不明であるが、兼澄・長能・嘉言らの和泉式部をまじえての五月の雅交である。

扨、嘉言の長能との関係について少しみておきたい。家集には特に二人の関係を示すものは無い。しかし袋草紙の、能因・長能の師弟関係を結ぶ一文に

能因言、和歌何様可〻読候哉。長能云、

山ふかみ落ちて積れる紅葉ばのかわける上にしぐれふるなり

如此可〻詠と云々。自此為師。仍玄々集多入長能歌也。予案之件歌嘉言歌也。仍以後進歌為〻證哉。若口伝僻事歟。

とあり、これについて犬養廉氏は次の如く述べられる。

事は些か臆測に類するが（中略）江談抄第五「斉名者正通弟子事」に「為憲集云、順以家集不付一弟子正通付我…」と見える、これは源順の第一の弟子正通に対して、後進為憲も亦同門の弟子だったことを思わせる。長能に対する嘉言・永愷の関係も同様だったかも知れない。

嘉言が長能の弟子として既に功を積んでいたと見るのは妄断であろうか。

長能の示した歌は確かに嘉言の作である。詞書は無いが、家集153に収っており、詞花集・玄々集にも入集している。その歌風からみても或は犬養氏の述べられる如く、長能と師弟関係にあったとみるのが妥当かも知れない。

長能は、天延二年三月の一条中納言為光家歌合以来しば〳〵歌合の席に連ったが、中でも寛和二年六月十日内裏歌合には、公任に御して右の講師をつとめ、又、拾遺抄にも六首入集を見るなど当時に於ける歌壇的地位は相当高かったようである。花山院東宮時代からの側近であったことは言うまでも無いが、説話の伝えるところによれば或は歌の好敵手道済と歌を合わせて争い（俊秘抄）、さらには一首を公任に揶揄された為に憂悶不食となって遂に死に到ったという和歌扁執の者であった（袋草

紙）。なお、兼澄と親交のあった事も二人の家集により知られる。

嘉言が花山院のもとに出入りしたらしい事を証する資料として、家集に次の三首がある。

花山院にて　三首

あるしの女とものいふほとにことねりわらはのねふりたる所

100 あきのよをねてのみ君におくれぬはめはこゝろにもかなはさりけり

なくなりたる人のいゑありすなはちその人かはねになりにけり

101 ほともなくけふはかはねとなりにけりあはれはかなきゆめのよなり

や

おきなみつくむ所

102 そこゐなきいはゐのしみつ君かよにいくたひみつはくまむとすらむ

100は何かの物語絵の歌で、101は六道屏風絵の歌、102は桧垣伝説を絵にした屏風の歌ででもあろうか。花山院との個人的な歌のつながりを示すものといえる。通説に従って考えれば、拾遺抄に入集の無い嘉言が拾遺集に三首入集していることも、花山院との何らかのつながりを暗示するように思う。院の生活の大きな要素を占めていた詠歌の分野への参加は、やはり長能との関係に起因するものと思われる。

家集122～132にかけて一連十一首の屏風歌がある。そして、まがいなく同じ屏風のために詠んだと思われる一連の歌が道済集・和泉式部集にもみられ、それが権中納言殿の屏風歌であることを知る。四季絵の屏風歌である。

少々長くなるが、三者を対比してみると次に記す如くである。屏風絵に対する視点や表現は、三者微妙に異った面を見せているが、同一の屏風絵を詠んでいることは自ら明らかである。

源道済集は「類従本」により、和泉式部集は「松平文庫本」によったが、和泉式部集では屏風歌の部分は重出歌を含むため、後出部の整理された851～865番に至る一連十五首の方を引いた。なお、詞書の対比を容易ならしめるために、便宜上、部分的に歌順を変えて排列した。

〈大江嘉言集〉

屏風の歌あるしまろうと花みる所

122 はなの木をやとにほりうへてはることにめつらしとおもふひとにあふかな

〈源　道済集〉

権中納言の御屏風歌

81 花のきを風にまかせてわか宿を尋ぬる人にあはぬ日そなき

82 かへるさは花の盛に成にけりおもふ事なきた

〈和泉式部集〉

権中納言の屏風のうたさくらさきたるいゑにまらうとおほかり

851 うへしうへはかゝれとそかし桜花みにとてこそは人のきつらめ

此歌前二有

852 春ことの花の盛を音にきく人のきゐてはなかゐせぬなし

むまにのりたる人二三人はかり桜の花のもとをすくしりにゆく人花をかへりみる

123よそなからみてやすきかしさくらはな我ひとりゆくみちにしありせは

霞山花を、しむ

124あすまてもありけなかりし山さくらかすみのうちにちりやはつらん

女なてしこをみる所

125こゝろあらむ人にみせはやあさつゆにぬれてはまさるなてしこのはな

五六人ふちのはなをみる

126いゑことにおりはかはらしふしのはなまつにちとせをかけてこそみめ

むまにのりたる人二三人かすかなる山みちをゆくはしあり

127ゆきかえりわたりしはしもうせにけりいくとせにかはみてはなりぬる

むまにのりたる人二人とをる山をこゆ

128ふもとにてそらをみえつるむらくものふむはかりにもなりにける哉

ひにも有かな

かすみたつ山さくら

83きのふより散とそみえし山桜今朝は霞のたちへたてつゝ

84みそめては帰らさらまし常夏に恋しき人をこさせてしかな

五六人はかり松の木の下にありふちの花咲たり

86常盤なる松にかゝれる藤なれは散とも千世はたのもしき哉

馬にのりたる人みたりすくかけはしあり

85心してこまはゆかなんあし引の山のかけはし苔おひにけり

87峯にたにまた登らぬに日は暮ぬ月は出なんこえやはつると

88吹風にいまはさやかに成にけり秋ときこゆ

さくらかりにあまたゆく人ある山をすく

853あ同るかきり心をとめてすくるかなはなもみしらぬこまにまかせて

山のかすみ花をかくす

854はな同〳〵と人にみえなむ立くもる霞のうちに風もこそふけ

なてしこおほかるいゑをなかめてゐたり

855咲同しよりみつゝひころに成ぬれと猶とこなつにしく物そなき

まつにふちのかゝりたる所人〻おほくよりてみる

856ふ同ちなみのたかくも松にかゝる哉すゑのなみこすなこり成へし

857ことはふちちらて千とせをすくさなん松のときはにきつゝみるへく

たひ人山をくるみちにはしありくちやふれたれはわたりわつらふ

北歌前二テリ

861しはくちてよるへきみちもなかりけりみねよりわたる雲ならすして

北歌前二有

とをき山をひとりゆく

858こしかたはやえの白雲へたてゝきいと、山路のはるかなる哉

人の家に琴ひき笛ふきてあそひしたり

859人同のみゝさへさむき秋風にふきあはせた

るふえのこゑ哉

山里に人家ありもみちはつかにみはやし
に霧たちこめて

89嵐のみ吹山里のもみちはをきりたちこめてく
る人のなさ
海のほとりに松ありつたもみちかゝれり

90紅葉して松にかゝれる蔦みれはかくて千年の
秋そしらる、

91松をのみ巡りてあまのうへたれは千世の住家
と思ふなるへし

92こまなめてかりそめと行は朝ほらけ松風寒く
雪降りにけり

るふえのこゑ哉

960 ふえのねはもみちをふ□(虫損)あらねとも霽にえ
たもうこくへき哉

人もなき山へにもみちふりしけり

963 北家前二有 ちりちらすみる人もなき山里の紅葉はやみの
にしき成けり
松の木につたのもみちかゝりたり

962 同 もみちするつたしかゝれはをのつからまつも
あたなる名こそ立ぬへき

はまつらにいゑある所有あま人もみへす

964 同 いつかたの風にさはりてあま人のあまのとま
やをあらしはつらん
雪いみしうふりたるにたかすへたる人有

965 同 空にたつ鳥たにみえぬ雪もよにすゝろにたか
をすへてける哉

権中納言が果して誰か、明確ではないが、道済集の排列から杉崎・五島両氏は、長保三年頃の詠作、権中納言は藤原斉信ではないかと見ておられる。[註36] 清水文雄氏の「定頼」とされるのは時代的にみて無理であろう。[註37] とにかく嘉言が和泉式部・道済に御しての詠作である。

道済は以言の弟子で後に一双をうたわれた（江談抄）すぐれた詩人であったが和歌面でも活躍し三百余首もの家集を残すという、文字通り和漢兼才の文人であった。嘉言とは翰墨の先輩後輩の関係でもあり、特に和歌を通しては親しむ機会も多かったのであろう。道済と和泉式部の交流も両者の家集から知る事が出来る。

また、嘉言と和泉式部の交友については、次の二首をも拾うことができる。

〈大江嘉言集〉

花心しつかならす

116さかぬよにちるまてはなにつけたれははるの心のそらにもあるかな

はるのこまつみとりをます

117ちよまてはかはらさるへきまつなれとはるはみとりのふかくそありける

歌題の表現は、いくらか異っているが、同じ場で詠んだものと見てよいであろう。

また道済と同座して詠んだと思われるものとして次の歌がある。

〈大江嘉言集〉

いゑのはなにむかひてのべをおもふ

78我やとのためしはかりのはきをうゑて　本

ソラニサカ〳〵（ノノ）アキヲシルカナ（京女本）

或本

八月十五夜

79ことなりといひふるしたるあきのよのなかきこよひの月はつき

〈大江嘉言集〉

夏くもり夜の月

〈和泉式部集〉

花の時心不静雨の中に

松緑をますといふこころを

人のよむに

451のとかなるをりこそなけれ花を思心のうちに風はふかねと

452松はそのもとのいろたに有物をすへてみとりもはるはことなり

〈源道済集〉

八月十五夜左衛門督殿にて

210大空のつねよりひろくみゆる哉ちれる雲なくてりみてる月

同殿にて思野花と云題を

211秋の野はゆきてはみねと思ひやる心のうちに花そ咲ける

〈源　道済集〉

夏夜三首思深夜月

かは

また、

〈大江嘉言集〉

よふかくほと、きすきく

91なつのよをまたせ〳〵てほと、きすたゝひとこゑになきわたるなり

うのはなをたつぬ

92うのはなをたつぬるほとにやまかつのあひしる人になりにけるかな

〈源道済集〉

或所にて聞郭公よしよみし

におやの服なるとしにて

34いにしへにことにも有かな郭公物思ふ時は声かはりけり

卯花をたつぬ

35卯花の咲るあたりを尋ぬれはしらぬやとをもしりぬへき哉

前者は、道済集の詞書から左衛門督殿の邸での詠作と知られる。歌順が両者入り替っていてや、表現が異るけれど、同機会の作とみてさしつかえあるまい。杉崎、五島両氏は共に寛弘五六年頃の詠作とされ、左衛門督は寛弘五年とすれば公任、六年とすれば頼道となるので、この二人の中いずれかであろうと述べられる。図書寮本道済集の書入れには「公任卿也」とある。いずれにせよ、秋の夜の左衛門督・道済・嘉言らの雅交の一端を示すものである。後者は夏の夜の交友であろう。

さて、能因を加えての交友を物語るものとして次の歌が見出される。

〈能因法師集〉

154 なつのよの月は宵にてあけぬるをにしなる山
のたかくもあるかな
夜とこなつをおもふ
155 あけぬれは色〳〵にあるとこなつのよるはに
しきのはなにそ有ける
ふゑをきゝて
156 さよふかみはるかにふゑのきこゆなるいつ
よたれかまつねなるらん

道済集には「夏夜三首」とあって、「深夜」と「くもり夜」の相違があるが他は大体同じである。また、能因法師集では、一首のみの記載であるが、その詞書から道済宅に集うてのものとしられ、やはり同夜のものと思われる。そして左注にその夜の詠作中能因のこの歌が最も賞讃をあびた由を記す。[注38] 能因法師集の排列から十八才頃の作、寛弘三年頃かと犬養氏は推定される。しかし、道済集の排列からは寛弘五、六年頃とみて妥当な位置に属している。[注39] 検討を要しよう。

嘉言と能因の交友は、能因法師集に左の如き贈答を収めることによってそのあらましを知りうる。

嘉言あつまへくたるとてをくりし
1 なか月はたひのそらにてくれぬへしいつこにしくれあはんとすらん
かへし
12 あつまちはいつかたとかはおもひたつふしのたかねは雪ふりぬらし
長楽寺にて人々故郷霞心よむなかに
25 わたりつるみつのなかれをたつぬれはかすめるほとやみやこなるらん
嘉言

207 雲はれて夜も更ぬらし月影ののいるをもみ・(で脱カ)
や、まむとす覧
夜思瞿麦
208 よの程にさきやしぬらん常夏の花の盛はい
こそねられね
聞村笛
209 おきるつ、ねさめのみする頃にしもよ深き、ふえ
の声を聞哉

あめの夜とこなつを思心、みちなりかいへ
にて人〳〵よみしに
20 いかならんこよひの雨にとこなつのけさたに
つゆのおもけなりつる
其夜人〻、以此歌為第一矣

26 (後) 山たかみみやこのはるをみわたせはた、ひとむらのかすみなりけり
正言
27 (後) よそにてそ霞たな引ふるさとのみやこのはるはみるへかりける
みつから
嘉言つしまになりてくたるとて津のくにのほとりよりかくいひをこせり
32 (後) いのちあらはいまかへりこん津のくにのなにはほりえのあしのうら葉に
かへし
33 なにはえのあしのうらはも今よりはた、すみよしのまつとしらなん
嘉言つしまにてなくなりにけりとき、て
36 (新) あはれ人けふのいのちをしらませはなにはのあしにちきらさらまし

おそらくこの他にも幾多の贈答が交されたことと思うが、詞書から現在知られるものはこれだけである。能因とは、兄の正言をも交えての親交であった。その交情は嘉言が対馬に没するまで続き、その死をいたむ歌には深い哀感がある。能因は、後に玄々集に嘉言の歌を四首、正言の歌を二首いれている。能因

の学生時代、正言、嘉言共に学曹における先輩であったことや長能との関係から、能因が近ずくものとなったのであろう。なお、道済と能因の関係については犬養氏の論考に詳述されている。

河原院について『拾芥抄』「中・第二十諸名所部」には

河原ノ院　六条ノ坊門南萬里小路東八町云云、融大臣家、後寛平法皇御所（号六条院）本四町京極西、号東六条院

と記される。河原の院はもと左大臣源融の有名な旧宅であったが、一条朝当時はすでに荒廃に帰していた。道済・兼澄・能因らがこの風流文雅の交流の場であった河原院に集う人々であったことは、その家集や詩文から知られるが嘉言にも家集39に左の歌がある。また同歌は後拾遺集の入集歌でもある。

河原院のあれたるよしなるへし

39さと人のくむたに今はなかるへしいはゐのしみつみくさゐにけり

詞書は編者の補ったものであろうが、嘉言も河原院に出入りする、いわゆる河原院グループの一人ではなかったかと思われる。兼澄や道済は、当時河原院の中心人物であった安法と親交があり、或はまた恵慶・元輔・輔親らとも交流があった。能因は安法没後も安法女の世話役をつとめている。さて前述の嘉言の歌は、次に記す今昔物語の一文にも記されている。この一文は附会や誤りを多く含むが、全体として文人たちの往時の雅交をしのばせるに足る。[注40] その後半部を記してみよう。

今昔物語巻第二十四於河原院歌読共来リテ読ニ和歌ヲ語第四十六

（前半略）

西の台ノ西面ニ昔ノ松ノ大ナル有ケリ。其ノ間ニ歌読共、安法ノ居ノ房ニ来テ歌ヲ読ケリ

古曽部ノ入道能因

トシヲレバカハラニ松ハオイニケリ子日シツベキネヤノウヘカナ

ト。□ノ善時

サト人ノクムダニ今ハナカルベシイタキノシミヅミグサニケリ

ト。源道済

ユクスエノシルシバカリニノコルベキ松サヘイタクオヒニケルカナ

ト。其後、此院弥ゝ荒レ増テ其ノ松ノ木モ一トセ風ニ倒レシカバ人ゝ哀レニナム云ケル、其院今ハ小サキ宅共ニテ堂計トナム語リ伝ヘタルトヤ。

嘉言の歌は、39と一致し空白は「江」、「善時」は「嘉言（よしとき）」の宛字である。また道済の歌は、道済集144・金葉三奏本とも一致し拾遺集461の入集歌でもある。この二首については誤りは無い。それは歌人達の、今は荒れるにまかせた廃院の盛時を偲ぶ様を伝えるに十分である。嘉言もまたこの院に盛時を偲ぶ一人であったに相違ない。

## 四、むすびにかえて

以上、詠歌活動と交友について考察してきた。

嘉言は頻々と歌合などに連座する程の歌人では無かったが、時には道長第の歌合に招かれ、又、さる権中納言の屏風歌を詠むなど社会的には一応の歌人としての位置は保っていたと言える。そして、個人的には、花山院をはじめ帥宮敦道親王・長能・道

済・兼澄・和泉式部・能因らと歌を通して交流があったと言えよう。これら交流のあった歌人達は、一見してすぐわかるように、或は主従関係・師弟関係、或は恋愛関係・血族など、それ〳〵個々に何らかのつながりを持つ人々であり、長能を除いては皆藤原氏でないことも注目を要しよう。

しかし、長能とても藤氏とはいえ花山院に密着した歌匠であって、いわば時勢の波に乗りおくれた一歌人に過ぎなかった。花山院・帥宮が、その身分に比して恵まれなかったことは云うまでもないが、一面から見れば、時勢批判的な行動の表れとして歌にその場を求めたと云われる道済にしても、兼澄や能因にしても官位や出自の上で決して恵まれた人々では無かったし、嘉言も又その例外では無い。不遇をかこつ心が、これらの交友関係の背後に潜んでいたとの臆測もまた成立つのではあるまいか。世事の煩累を脱し、文雅を求めるという共通の姿勢が、さゝやかな心のふれ合いとなり、これらの交友関係となって表れたのではなかったろうか。しかし、それは純粋な文学的要因のみによる結合と言うよりも、前述の如きそれ〳〵の生活上のつながりと相俟って、自然に結ばれていったものと思われる。

## 註

1「大江以言考」後藤昭雄氏(「平安文学研究」48輯)
2尾原久子氏「儀同三司小考」(「平安文学研究」44輯)
3目崎徳衛氏「能因法師における二、三の問題」(『平安文化史論』所収)。大養廉氏「能因法師研究」(「国語国文研究」30・35号)
4「女子大国文」(京都女子大、65号)
5後藤昭雄氏前掲論文
6『本朝世紀』長保元年五月十一日条に「少録弓削清言」とある。
7『御堂関白記』長和二年四月二十七日条「清言蔵摩守」(辞表の件)とある。
8『小右記』正暦四年一月二十五日条及び『本朝世紀』同年閏十月二十六日条。
9『権記』寛弘三年二月十四日条「読師寮允正言」とある。
10経歴は後藤昭雄氏前掲論文による。
11『本朝文粋』巻七「請召問諸儒決是非文章生試判違例状」に文章生であった事が、又『日本紀略』康保二年三月三日、天禄元年三月十五日、長徳三年二月十四日条に小内記であったことを載す。
12後藤氏前掲論文26頁。
13二首は「よしとき」のみで姓は記されていない。
14拾遺集350は長徳二年伊周左遷時のもの。501は年代不明だが巻九に収るので巻十五までの成立、長保三年七月頃まで以前の作とみられる。又、1031は兼澄らと帥宮邸で詠んだもので、兼澄散位の長保四、五年頃の作かと思われる。従って弓削姓で歌が献上され、そのまゝ撰入されたのではないかと考える。右衛門督と記された公任の例などと同様に、最終的な整理が行れないまま擱筆をの運びとなったのではなかったか、と考える。又、麗花集所収歌は、長保五年五月道長家歌合二首、他一首は道済らと詠んだもので道済集の排列から長徳年間以前の作と考えられる。
15堀部正二氏「麗花集攷」(『中古日本文学の研究』所収)
16曽神昇氏『平安私観撰集解説篇』(古典文庫)
17残存資料から考えると寛弘六年正月但馬守に任じているから、能因法師集での対馬守として下る時の贈答は、少くとも但馬守を下りて後のこと

でなければならない。仮りに翌七年に下りたとしても、対馬に下り当地に没するまでには、もう少し時間的経過があったと考える。なお、堀部氏は前掲論文に於て「七年卒」の傍証として「御堂関白記の寛弘七年二月三十日条に既に大外記善言死去せるの記事がみられる」と注記されるが、これは嘉言のことではなく、大外記滋野善言のことである。

18 久曽神氏は「国語と国文学」（昭和二十三年二月号）「麗花について」及び『平安私家集』における麗花集の成立推定期間について、「寛弘二年六月乃至同六年三月」の間とされるが、氏の言われる三条天皇の「東宮であった寛弘二年六月二十六日（御年十二才）乃至同八年六月十三日（御年十七才）の間」は、『寛和二年七月十六日（御年十一才）～寛弘八年六月十三日（御年三十七才）』と改められねばならない。従って、長保五年五月十五日の道長歌合の日から「左衛門督公任」の在任期間の最終日「寛弘六年三月四日」までが麗花集の成立時点決定可能な範囲と広げられねばならない。期間については堀部氏の説に妥当性がある。

19 陽明文庫本「後拾遺和歌抄」の大江公資歌脚注「（略）母儀同三司家女房」による。

20 正暦四年一月二十五日、二月十二日、同二十五日条。

21 「前内大臣はりまへまかりけるともにて川じりいづる日よみ侍りける　大江正言」とする。

22 「ふるさとをわかるゝとき　思ひ出に名にふる里の山なれどかくれてゆかば哀れなりけり」と多少異同がある。

23 25、『平安朝歌合大成㈢』〔九七〕647頁参照。

24 嘉言の歌として万代集に所収。続千載集には「よみ人しらず」として入る。

26 「女子大国文65」京都女子大本翻刻の解説。

27 権記には「甲辰。参内。御読経結願。左大臣被退出。候御共。後有和歌合」とある。

28 『平安朝歌合大成㈢』〔一〇九〕682頁参照。

29 30 『平安朝歌合大成㈢』

31 貞元二年とすれば、公任が十二才である点で公任卿集の歌を果して詠みえたかについての疑問があるのではあるが。

32 『権記』長保元年九月十一日、十月七日条

33 『花山院の生涯』今井源衛先生著161頁。

34 源兼澄集は「桂宮本」、藤原長能集は「類従本」和泉式部集は「松平文庫本」を用いた。

35 「国語国文研究」35号前掲論文37頁

36 杉崎重遠氏『勅撰歌人伝の研究』の「源道済」。五島和代氏「源道済考」（「文芸と思想」32号。）

37 清水文雄氏「和泉式部集の成立」（「国文学攷」第一巻、昭和十年。）定頼が長元二年権中納言となった時には、嘉言らはすでに故人である。

38 前掲論文㈡

39 大養氏は前掲論文に於て、能因法師集の排列の年代決定の規準の一つとして「嘉言の対島任国は寛弘六年正月二十八日のことである（歌仙伝）」とされるが、実は歌仙伝での寛弘六年正月の任は「但馬守」であって対馬守ではない。単なる誤植ならばともかく、「能因法師集」32 33番歌にみられる対馬任国に際しての難波からの贈答は、少くとも但馬守を辞してからの任国の際でなければならず、とすれば、対馬任国の時点は大養氏の計算との間に二、三年の誤差を生じるのではないかと思われる。

40 大養氏前掲論文㈡に詳述されている。